

# 余暇における能動性

## ——「楽しさ(Enjoyment)」と「快樂(pleasure)」の差異からの検討——

関西学院大学社会学研究科 中川和亮

### 目的)

本研究は、われわれが余暇に参加する際の能動性／受動性を検討することを課題とする。検討するにあたって補助線としたのは、M チクセントミハイの「フロー理論」である。チクセントミハイは、ロッククライミングや日常の仕事といった数多くの事例考察を通じて、「楽しさ(Enjoyment)」という内発的報酬(Intrinsically Rewarding)の意義を見出した。本研究は、「フロー理論」を補助線として、「楽しさ(Enjoyment)」と「快樂(Pleasure)」の差異から余暇における能動性／受動性を峻別することを目的とする。

### 方法)

チクセントミハイによれば、「楽しさ(Enjoyment)」は自己の成長に寄与する。一方「快樂(Pleasure)」は自己の維持に寄与するものの、その場で完結してしまうのである。チクセントミハイの「フロー理論」における余暇の議論は「楽しさ(Enjoyment)」と「快樂(Pleasure)」の差異の検討が中心となる。本研究では、「フロー理論」を補助線として、余暇を消費という観点からとらえた先行研究と自己の成長という観点からとらえた先行研究をもとに、余暇における能動性／受動性を検討する。

### 結果)

消費という観点から余暇をとらえた先行研究を検討した結果、余暇においてわれわれは能動的に参加することは可能であるが、「快樂(Pleasure)」をもとめているのである。一方自己の成長という観点から余暇をとらえた先行研究を検討した結果、余暇においてわれわれは能動的に参加することは可能であり、「楽しさ(Enjoyment)」を醸成する機会となるのである。そして、われわれの余暇に対する意識の生成という観点から、①「暇な」余暇 ②「暇にならないための」余暇 ③「暇ではない」余暇があり、①と②は消費という要素が強く、「快樂(Pleasure)」を得ることで充足されるが、「暇ではない」余暇については、「内発的報酬(Intrinsically Rewarding)」を伴う「楽しさ(Enjoyment)」の醸成が必要となる。

### 結論)

本研究における意義は、われわれが余暇に参加する際、消費という観点から余暇をみなす場合と、自己の成長という観点から余暇をみなす場合では能動性に差異があるということを見出した点である。すなわち、一方では余暇を消費とみなすことにより、積極的に余暇に参加することが発散の機会となる。他方では、「楽しさ(Enjoyment)」を醸成する余暇に参加することは自己を成長させる機会となるのである。

### 主要参考文献)

- Csikszentmihalyi, M., 1975, *Beyond Boredom and Anxiety: Experiencing Flow in Work and Play* San Francisco: Jossey-Bass Inc, Publishers. (=2000, 今村浩明訳『楽しみの社会学』新思索社.)  
———, 1990, *Flow The Psychology of Optimal Experience*, New York: Harper Collins Publishers. (=1996, 今村浩明訳『フロー体験——喜びの現象学』世界思想社.)